第五號

114
A 1437
2

早稲田大學圖書

第十六号ノ第一号ノ別書

ビンカム君ヨリ寺島君ニ送レル書簡

以手紙啓上仕候陳ハ本月十七日ノ日本日々新
版新聞「ヘラルド」ヲ見テ日本ヨリ遠ク船ヲ出ス
ハ台島ノ東部ヲ日本領トナシ開拓セントノ企
テアルヿヲ予始メテ知レリ而ノ又同新聞ニ云
ク此船ハ米國ノ國旗ヲ立テ何等ノ布告モナク
出帆セリ之レ半賊ノ挙ト云フ可シト又云ク米
國全權公使ビンガム君ハ日本ノ此挙ニ明カニ
許サヾルモ黙許セシナリト又云ク米國要府モ

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

亦此挙ヲ日本ト共ニ行フ支ト見ヘテ米國士官
ノ此挙ニ臨隨スルヿヲ許可セリト
斯クノ如ク右ノ辭ノ中ニ明々瞭々ニ貴國要
府ヨリ支那或ハ其一部分ニ対シテ軍ヲ起スト
ノ意ヲ含メリ故ニ予日本政府ノ命ヲ受ケテ台
島ニ日本兵ヲ送リ戦ヲナス為メニ雇レタル米
船俗号及ビ此挙ニ使用セラレタル米人ノ名ヲ
知ランヿヲ希望ス
予一度モ斯クノ如キ軍支ニ米國ノ人及ビ船ヲ
使用スルトヽヲ日本ノ照會ヲ受ケタルヿナキト

云フヿヲ予ノ職務ニ於テ云ハザルヲ得ス予ハ只
ニ米人二名貴國要府ヨリ此挙ニ参與セシヿヲ
頼ヲ受ケシ処支那或ハ其一部分ノ人民或ハ和
レノ國ナリトモ合衆國ノ和親國ニ對シテノ兵
支ニハ貴國要府ノ頼ミニ應シ難シト断レルヿ
ヲ美知セリ而メ予前ニ掲示セシ新聞紙ニ云ヘ
ル如ク貴國政府ヨリ支那或ハ其一部分或ハ其
他ノ國ニ対シテ兵ヲ起サルヤヲ知ランヿヲ欲
スヿ之レ私ニ知ランヿヲ欲スルニ
知ラントス故スルナリ右ノ件々ヲ閣下ノ要ニ

示アラシテ希望ス頓首

千八百六十四年日本東京ノ米國使館ニ

於テ　ジョン、エ、ビンガム

寺島宗則公閣下

第七十六号ノ第二別書譯書

寺島君ヨリビンガム君ニ送レル書翰

千八百七十四年四月十八日附ノ貴書拜受仕候

陳ハ横濱出版日本日々「ヘラルド」新聞ニ日本ヨ

リ遠ク船ヲ出スハ台島ノ東部ヲ日本領トナシ

テ開拓セントノ企ナリトテ米船ヲ雇フタリト

又閣下此雇ヲ黙許セリトて貴國要府ニテ貴國

士官ノ此挙ニ跟隨セルヲ許可セリトノコトヲ御

承知アリタリト而メ我政府ニテ支那或ハ其一

部分ノ人民ニ對シテ軍ヲ起ストノ意ヲ入ラル

ヲ以テ閣下我國ノ政府ニテ台島ニ兵ヲ送リ戦

ヲナス為メニ雇フタル米船ノ名及ビ支那或ハ

其一部分ノ人民ニ対シ軍ヲ起スヤ否ヲ知ラン

コトヲ欲スト然シ共予ト閣下ノ近日ノ会談ノ節

ニ御談話ニテ人トシ如ク我國民台島ニ著セシ

時ハ強奪或ハ待セルヲ以テ今後安　寺島ノ

近海ヲ尋サスル便宜ノ方法
メニ台島ノ人ニヨテ我政府ヨリ直
ヲ遣レル十リ迚ル共士人我使節ニ抵抗セン
量リ難ケレハ其護衛トシテ兵隊ヲ送レルテ
少シモ我政府ニテ支那ニ対シテ戦ヲナスノ意
存ナシ而メ此挙ニ雇フタル貴國ノ士官船鑑全
ク軍夫ニ使用スルニアラス只平常利ニ
夫ニ使用ス右御推察之レアリ度候且其他ノ件
ニハ予目今ノ台島遠行記録ヲ差シ送リ候間御
披見アリ度右御答ニ及候頓首謹言

明治七年四月十九日東京ニ於テ日本帝
國ノ外務卿寺島宗則
日本在留亜墨利加合衆國ノ特命全権公使
ション、エ、ビンガム公閣下

第七十六号ノ第四別書
ビンガム君ヨリ寺島君ニ送レル書簡
以手紙啓上仕候陳ハ本月十八日附ノ台島行ニ
於テ貴國要府ニテ米國ノ人及ヒ船ヲ雇フ
一条ニ関セル予ノ書簡ニ対ノ本アリ
仕候ヲ君中ニ昨日御面会ノ節

政府ヨリ台島ニ船ヲ出メ給フハ支那
軍ヲ起ス ノ存ハ必シモナク且ツ國
ノ此挙ニ雇ハルヽハ全ク單支ニ使用ヲ
ラス只平常穏和ノ支ニ使用ハルトノ御談話ヲ
再ヒ御記載ニ相成リ候得共右貴信并ニ副書ヲ
能ク勘弁仕候得ハ予再ヒ貴國ノ台島遠征ノ支
那ノ許恕書ヲ得ル迄ハ海陸軍ト同行スハ
ニテ雇フタル米國人及ヒ船ヲ差留ルヲ我職務
ニ適セルヿト存ス假令貴國委府ヨリ台ノ西土人
ニ迄兵隊ヲ護衛シタ高官使節ヲ遣ハサ
ルハ貴國ニテハ全ク戦ヲ企スノ意ナクトモ支
那ニテ此挙動ヲ見ルトキハ台島内ノ支那頭ニ攻
入スルヿト見做ス可シ然ラハ必ラス兵ヲ以テ
お迎ヘテ抗抵ス可シ之レ日本ニテハ大不ト
支タリト雖斯クノ如キ場合ニ立チ至ルノ前ニ
貴國ノ此挙ノ縁故目途ヲ支那ニテ許恕スルノ
昏ノ出ス可キ哉蓋シ難シ出ヒバルハ万國共ニ
此ノ而ノ予只ニ支那ニテ許恕セシト云フ支
承リタル共ナリ予ノ受ケタル書中ニ
見ス 並ノ見サルヲハ前文ノ如ク

ヲ得　則文ノ如ク去ル八甚タ心苦シキ
且又貴國政府ニテ御雇ニ成リ
米船「ニューヨーク」と号及ヒ水人セチラルヒ、ゼン
ドル氏リューテナント、コンマンドル、カツセル
氏及ヒワツソン氏ノ三名ハ貴國要府ニテ此挙
ニ付キ支那ノ許諾書ヲ得ル迄台島ニ行クヲ貴
國要府ニテ差シ止メラレンヿヲ希望ス候敬白
以上

千八百七十四年四月十九日東京日本在留
合衆國公使館ニ於テ　ジョン、ビンガム

日本帝國外務卿寺嶋宗則公閣下

第七十六号ノ第五別書決

日本首相ノ布告

明治四年十一月(千八百七十一年十一月)琉球国
民台湾海岸ニ漂着シ其一行ノ中ヲ五十四人台
湾土人ノ為メニ害殺セラレタリ
同六年三月(千八百七十三年二月)小田縣下ノ民
四名台湾ニ漂着シ殘待セラレタリ
昨年和親条約ヲ結ヒノ為メ副島種臣
大使ニ命シテ支那要府ヘ差シ遣セシ時

談判ニ及ビシ処右土人ハ台島中支那管轄ノ地タル旨ヲ称ヘタリ

台湾島ハ日子近傍ニアリテ前条ノ如ク此島ニ漂着スルヿ屢アリ故ニ台嶋ノ此部分ニ居住スル人民ヲシテ今後前条ノ如キ所業ヲ改メシムルハ我貿易保護ノ支ニ於テ欠ノ可ラザルノ支タリ右決定ノ施行スル為メニ西郷ノ右長官トシテ管下ノ者ノ率ヒシメ前支ヲ究問シ且ツ後来我国民ヲシテ安全ヲ得セシムル方法ヲ設立スル為メニ台島ニ差遣ハサルヿ其上民我国ノ使節ニ対シ何如ノ支件ヲ論スルヤモ量リ難クシテニ由テ護衛ヲ差シ遣ハサル

千八百七十四年四月十七日

太政大臣三條實美

第四百三十号

ビンガム君ヨリフィス君ニ送レル書簡

第七十八号

以手紙啓上仕候処ラハ本月二十二日附第七十六号ノ予ノ台島遠行ニ関セル書簡ノ後ニ記ス責ニ就テ予ヨリ送ル書簡ノ条ロ

本外ヲ々ヨリ而取リタル其咎及ヒ其咎ヲ辺ノ
予ハ咎ハ一早一号ノ別封ニ記載ス御披見　敬
下度此ハ予ヨリ云送シタル米船ノ二ヨルル
ク早又ク米人三名ヲ台島遠行ノ支那ノ許諾ヲ
得ル迄若シ留ムヘシトノ望ニ應シ日本長府ヨ
リ命令ヲ下シ雇フタル米國ノ人及ヒ船ヲ差シ
止メタル趣キ清水ヒ相成ヒ予思フニ命令長崎ニ届キ右人及ヒ船ノ
出帆ヲ止メタル支疑ヒナシ而メ予考フルニ此
遠行ハ定メテ立メニナル可シ最モ支那ニテ日
本使節ノ兵ヲ帯ヒテ台島ヲ到テ其海岸ニ漂着

着セル日本人ノ後来安全ノ方法ヲ其士人ト設
立スルヲ許諾ナル書ヲ出セハ予日本ニ此挙
ノ為メニ米國ノ人及ヒ船ヲ雇フテモ合衆國和
親國トノ戦ヲナス他ノ支ニ就キテ使用スル
ラハ之ヲ差シ留ルノ権ナシ
予右ノ処分ニ付キ足下ノ見込ト合シ御採用ニ
お成ランヿヲ欲ス故ニ百支御教諭ニお成度候
頓首謹言　五月二十六日着
千八百六十四年四月一十四日東京　於テ
ジョン、エビンヴ

第七十八号英一別書
第二十六号寺島君ヨリゼンガム君ニ送レル
書簡

千八百七十四年四月十九日附ノ第三十六号ノ
御返簡拝読仕候陳ハ日今日本ニ雇入レ使用ス
ル米人三名即チゼチラルレ、ゼンドル氏ワユー
テナント、コンマンドルカッセル氏ワッソン氏
及ヒ日本ニ雇入レ運送ニ用ヒアル米船「ニユー
ヨルク」号ヲ台島ニ送ル支ノ差シ留メラル、旨
兼諾仕候右ノ趣ハ閣下ノ望ニ随テ前文ノ三名
及ヒ一船ノ差留ル為メニ既ニ英筋ノ官員ニ対
達シ候且又三名ニ送ラル閣下ノ書簡ト共ニ送
ル可キ用意ヲナセリ頓首謹言
明治七年四月二十二日
日本帝國ノ外務卿寺島宗則

第七十八号第二別書
第二十六号ゼンガム君ヨリ寺島君ニ送レル
書簡

本月十九日附ノ台島ニ迄ル本要府ヨリ志ノ船
ヲ小[illegible]ノ長ニ與セル予ノ書簡ノ義トシテ去月

本月二十二日附ケ第二十六号閣下ノ御書簡拝
読仕候陳ハ貴國要府合衆國ノ権利ヲ挽アケ
テ速カニ令ヲ下シ予ノ書簡ニ記載セル人三
名及ビ米船「ニューヨルク」号ヲシテ台湾ニ迄兵
ヲ率ヒテ行ク挙ニ隨行セシメス且此挙ニ用ヒ
サル可シトノ予感謝ニ不堪候
日本ハ他國ノ関係ヲ管制スルハ我要府ノ欲ス
ザル処ナリ然レ共合衆國ノ法律ニ於テ合衆國
ノ人民ヲシテ合衆國ノ和親國ト戦ヲナス國ノ
海陸軍ニ入ルヿヲ禁ス

此米國ニハ海軍ハ貴國要府ニ雇ハレテ使用セラル
人都テ善ノ知ラスンハアラサルヿヲ貴國要府
ニテ注意アランヿヲ信ス頓首謹言
千八百七十四年四月二十三日東京ノ米國
公使館ニ於テ　ジョン、エ、ビンガム

第四百三十四号
第八十九号「ビンガム君ヨリ」ノ書簡
以書簡啓上仕候陳ハ日本首相ニ条四ノ台

島ノ布告ヲ出シ而メ之ヲ取リ消シ又五月二
十二日再ヒ其布告ヲ出セル之ノ報告ヲ受ケ緊
要ナリト存候間其写ヲ差シ進シ度而メ右布告
ニ説明セル目的ヲ施行セン為メニ台島ニ兵ヲ
帯ヒテ上陸セハ予考フルニ支那ニテ必然軍ヲ
向ケル所行ト見ン事疑ナシ予此件ノ支ニ付キ
一昨日日本外務卿ニ面会シテ談話ニ及ヘルキ
彼レ予ニ向テ語セル辞ニ曰今日本兵台島ノ東
南ノ地ニ上陸セリ然ル処其土人牡丹社ノ襲撃
セシ故必ズ之ニ及ヒ追ヒ退ケタリ此戦ニ彼方共
ニ死傷ニハタリトノ報告我要府ニ届キタリト
又彼レ之辞ニ支那ヨリ台島ニ「ゴンボート」到レ
リ之レニ支那高官ノ者乗リ込ミ居レリ之レ我
台島行ノ長官タル西郷ト談判セン為メニ来レ
ルナリトノ報告アリタリト
予彼ノ辞ニ支那ニテ台島中ニ日本兵ノ永キ間
陣取ルヲ許認スル証ヲ有スト云ヘル信シ難
シ而メ彼レ日本要府ニテ北京ニ者セル之ノ報
告アリタル使節ヨリノ直チニ右許認ノ報告ヲ
待ノアルヒ云ヘリ

四八〇十四日附ケ第七十八号ヲ以ノ書簡ニ於
テ予支那ニ對シテ軍ヲ差シ向ケル為メ米國
ノ人及ヒ船ヲ用フルヿヲ差シ留メタルニ由テ
日本外務々此挙ニ蒸氣船「ニューヨル」号ヲ用
フルヿヲ差シ留メタル旨ヲ足下ニ報告セリ而
右書簡ニ大平洋郵船会社ノ代理人セントル氏
予ニ面シテ右蒸氣船ヲ日本外務々ノ令ニ従テ
台湾行ニ用フルヿヲ差シ留ムトノ調印ヲナシ
タルヿヲ足下ニ報告セサリシ右命令ヲ日本外
務々ヨリセシ後テセントル氏再ヒ予ノ方ニ

来タリテ一ヶ月ニテ台湾行ノ兵隊及ヒ目下長崎ニ
在ル司々官外務々ノ下令ニ従フヿヲ嫌ヒ無理
ニ台島ニ船ヲ出サントス之レニ由テ長崎港ノ
我領事官マンキユム氏ニ右ノ旨ヲ予ヨリ報告
シテ外務省イ下令ニ従ハシメンヿヲ頼メリ予
セントル氏ノ頼ニ応シ彼ニ告ケ云ノ足下ノ入
費ヲ以テ長崎ノ領事官マンキユム氏迄電線
ニテ蒸氣船「ニューヨル」号ハ台湾行ニ用フル
ヿヲ日本政府ニテ差シ留メ[illegible]ル故ニ
[illegible]ニテ大蒸氣船ヲ差シ留メ又公ノ可キ報

サスヘシ然レ共右蒸氣船ヲ差留メ[illegible]リ
シヤ否ハ未タ兼リ及ス候但シ以前足下ニ報
告セシ如ク右蒸氣船ハ日本要府ハ台湾行ニ用
フルノ差シ留メノ令ニハ從ヒ候
二白数日前ニ今衆國ニ於テ支那幼年百ノ教育
ノ支那理支官リユンウイン子ヲ訪問シ而シテ彼
レ予ニ告ケテ云ク日本ノ台湾行ニ用ヒタル米
國蒸気船「ニユーヨルク」号ヲ差シ留メニ成リタ
ル旨ヲ予コリ足下ニ向テ礼謝ヲ述ンヿヲ上海
鎮台ヨリ[illegible]セラレタリト又彼ニ言ニ支那要府

ハ台湾島ニ八軍ヲ備ヘ近海ニ「ゴンボート」ヲ多ク
置クト而シテ彼レノ辞ヲ考フルニ日本兵速ニ台
島ヲ引キ揚ゲサル乎或ハ又一時彼地ニ止マル
トノ証ヲ支那要府ニ示メサヾレハ終ニハ日支
両國ノ際ニ戦争起ル可シ
予斯ノ如キ際ニ方リ日支両國ノ間ニ立チ条約
義務ヲ尽サント欲ス故ニ此大支件ニ足下ノ教
示アランヿヲ希フ頓首謹言(七月六日ノ着)
千八百七十四年七月六日東京合衆國公使
ジヨン・ヒ・ヒガム

「書、省」

日本首相ノ布告

布告六十五号　院省使府県

明治四年十一月(千八百七十一年)中琉球人五十人台湾ノ生蠻地ニ漂着セシ処土人ニ虐殺セラレタリ同六年三月(千八百七十三年三月)小田縣下ノ者四人同地ニ漂着セシ処殘待セラレタリ

我國ヨリ支那要府ニ全権大使ヲ遣セル支件中ノ一支ハ台湾ハ日本ノ離ルヿ遠カラザル地ナレハ彼ノ地ニ我國民漂着スルヿアル可シ且又制ス航海術進歩スルヲ以テ後来我國民彼地ニ到ル可シ然ルニ前条ノ如ク害ヲ受ケハヿ歎カハシキ支ナリ故ニ此度天皇陛下中将西郷從道ヲ台島行ノ都督ニ任シ彼地ニ到ラシメ第一ニ我國民ヲ虐殺殘待セシ者ノ罪ヲ正シ次ニ後来我民ノ航海ヲ安全ナラシムル所置ヲ謀ラシム

千八百七十四年五月十九日

太政大臣主條実美

写西一三一五号

〔四十三号〕

ノイス君ヨリビルマニ送シ

ル書簡

四月二十二日附ケ第七十六号同月二十四附

ケ第七十八号ノ日本ノ台島遠征ノ儀ニ付キテ

ノ足下ノ書簡拜読仕候陳シハ第七十六号ニ足

下ノ云ヘル千八百六十年ノ義定律第二十四条ノ

ハ予ノ説ニテハ蓋シ非常ノ権利ヲ合衆國ニ許

ス國ニ在ル公使ニ迄千八百十八年ノ局外中立

律ノ第八條ニ拠テ大統領ノ有セル権及ビ此律

ニ於ケル長府ニ拠テ有スル権ヲ施行スルヲ得

ルナリ

此律ニ背反セルト定ムルニハ合衆國ノ和親國

ト戦ヲナスヿノ目的アル者ナリ然ルトキハ此

背反人ヲ一方ニ戦ニ與力スルトシテ見做サヾ

ルヲ得ス但シ兵隊ヲ運送シ軍器兵具ヲ與ヘル

ヿハ千八百十八年ノ成文律ニ於テ有罪トナス

箇條中ニ記載セス

合衆國ノ戦國ニ向テノ國際ノ義務ハ亦國ニ於

ケル如ク東國ニ於テ豈ニ尽スニ到ラスト云

ヘトモ意アリ 米國人ノ自由ヲ得ル

支國ニアリテハ才知ヲ振ハシ
ノ自主ヲ妨礙セザランヿヲ欲ス而シテ米人ヲ雇
ヘ使用スル片既ニ日支ノ間ニ戦爭起ルヿ或
ハ又直チニ戦爭起ラントスル片其為メニ雇ヘ
テ使用スルニアラザレハ日本ニ雇ハレテ米人
使用セハ米國ノ國際義務ヲ破ルニアラス猶
米國ノ國法ヲ侵スニアラス
当省ニテハ足下ノ卓量高識ヲ深ク信ス故ニ右
事件ニ付別ニ指示スルヿナシ頓首謹言
千八百七十四年六月六日華盛頓府外務省

ハミルトン、フイス

於テ

第四百三十七号

第九十五号

ビンガム君ヨリフイス君ニ送レル書簡

以手紙啓上仕候陳レハ本月三日附ケ第八十九
号書簡ヲ送レル以来予報告ス可キ支振ノ口チ
最モ緊要ト存候台湾行一条ニ注目仕居候処右
支件ニ付キ報告ス可キ支ヲ得タリ
予本日去月二十六日附ケノ報告書ハ北京ヨリ受取リタリ右
ハウ[illegible]ル[illegible]ムス[illegible]ヲ第二

写ノ別書ニ記載セリ右別書ハ去月ウイーン附ケ
ノ支那外務掛リ内國ノ首班恭親王ヨリウイーン
レム君ニ送レル書簡ナリ足下右別尺ノ御披見
之レアリナハ台湾ノ生蕃地ハ支那ノ管轄地ニ
ルヿヲ恭親王保証スルヿヲ御会得アル可シ且
又恭親王支那在留ノ外國公使ヨリ支那ト和親
条約ヲ取リ結ヒタル各國ハ万國公法ニ拠テ日
本ニ助勢スルヿヲ禁シ且各國ヨリ其官吏ニ達
シテ軍器兵粮ヲハシテ日本ヲ助クルヿヲ禁スト
此度ノ日本ノ台島行ニ就キテ右ノ説ヲ聞キタ

ルヿヲ右書中ニ御看覧ニ相成ル可シ而シテ恭親
王ヨリウイーンレム君ニ送レル我國ノ条約ニ関
セル書簡ノ趣ヲ其他引ニ及ヒ而シテ去月十八日
ニウイーンレム君ヨリ予ニ送レル四月二十四日
ノ書簡(八十二号)ニ副ヘタル別書ノ各ニ予日本
ノ台島征討ニ於テ日本ニテ米國ノ人及ヒ船ヲ
雇ヒテ使用スルヿヲ差シ留メタルヿヲ報告セ
リ右書簡ノ写ハ第三号ノ別書乃チ七ツ又
同日ニ前条ノ予ノ所置振ヲ上海ノ[illegible]ド君
申ニ送レリ写第四号ノ別書ナ而シテ

ドル君ヨリ前書ノ巻ヲ去月三十日ニ受取リタ
リ即チ第五号ノ別書ナリ
前文ノ他ニ又報告ス可キ一条アリ曰ク海軍
副都督亜細亜船隊ノ司令官ペンノック氏ヨ
厦門ニ在ル合衆國ノ蒸気船「モノカシー」号船
将カウツヨリペンノック氏ニ迄電線ニテノ報
告ノ写及ヒ同氏ノ其答ノ写ヲ受取リタリ右写
ヲ差シ進シ候即チ第六号ノ別書ナリ足下船将
カウツ君ヨリノ電信ヲ御看覧アラハ厦門ノ領
台ヨリ日本兵隊ヲ引取ル可ク談判ニ及ヒ支
及ヒ同人ヨリ厦門ノ米國領事館ニ米人ノ引渡
ヲ助クルヲ禁セントスルヲ頼メルヲ及ヒ右領事官
船将カウツ君ノ助ヲ乞ヘルヲ御承知ニ相成
ル可シ而ノペンノック氏夫レニ答ヘテ船将カ
ウツ氏米國人民ニ命シテ支那要府ニ対シテ不
文ノ所業ヲナスヲ禁ス可シト云ヘリ
右支那人ノ書簡ニ拠テ考フルニ支那要府ニ
日本人ノ支那領ニ兵ヲ帯ヒテ侵入シタルヲ抵抗
シ且ツ日本人ニ対シ其侵入セシ地ヨリ速ニ引取
ル可キヲ談判シ又ハ此故ニ終ニハ兵器ヲ取リ

ヲ去戦フニ至ルニ可シ而ノ日本人ノ口月十八十
九ノ両日ノ所業ニ及ヘルヲ見ル其ハ予ノ以前
足下ニ報告セシ如ク千八百六十年ノ法律万國
公法及ト合衆國ノ条約義務ニ從テ米國ノ人及
ト船ヲ日本ノ雇フテ使用スルヲ差シ留メタル
ハ功ナシトス可カラス予ノ此書中ニ記載セル
支那ニ在ル我國ノ官吏ニ予ノ此度ノ所置振ヲ
報告セルハ足下ノ同意ナランヿヲ信ス頓首

千八百七十四年六月十八日東京合衆國ノ
公使館ニ於テ　ジョン、エ、ビンガム